

にしだばし じ うた 西田橋・地つき唄

無形民俗文化財（民俗芸能）

昭和52年8月19日指定

所在地：鹿児島市草牟田一丁目

保持団体：正調おはら節保存会

甲突川五大石橋の一つである西田橋を造った頃のものだと伝えられている。

踊りの演目は前唄、木遣り唄、西田橋の三つがあり、唄は最初の一節を一人が歌い（アゲと言う）、二節目から綱を引きながら綱子（綱を引く役目の人）が全員で掛け声をかけ歌う。木遣り歌も西田橋も同様に連続して歌う。

踊りは前唄と西田橋で踊る。木遣り唄には踊りはない。踊りかたは、前唄は右側で古式の内侍舞いを思わせるような踊りを、白装束に赤袴を着け踊る。この踊りは庭しずめ（場清め）の踊りとしてふさわしい踊りである。西田橋は、右側で数え唄に合わせて、かるやかに踊る。

構成は根とり（地つき櫓の中央で、竿を持つ男性一人）、踊り子5、6人、綱子（綱を引く人）10名位である。



西田橋・地つき唄

前唄、木遣り唄、西田橋の歌詞は、次のとおりである。

○前唄

- ・うれしゆ目出度の若松様よ 枝も栄える 葉もしげる
- ・この座敷は 祝いの座敷 こがね花さく 木実（きみ）がなる

○木遣り唄

- ・家を建てるは（ヤットコセ・ヨイヤナ）（ドッコイシャント）
- 地つきが基ごわんが（ヨイトナ）（ジャンダガソラエ）
- （イヤ・ハララガヨイ）（ヨイコラヨイ・トコヨイトコヨイトコセ）

○西田橋（地つき唄）

これは、1番から10番まであるので1・2・3番までを記する。

1. ヤコラ1つトノヨノエ ソイジャ
人もくいらぬ西田橋 お受けなされた帖佐様
ご心配かいな
（帖佐様のところが久保けんお氏採譜では、「いわながさまよ」となっている）
2. ヤコラ2つトノヨノエ ソイジャ
2人御用人申しあげ 見物なさるや 念のため
こいも実かいな
3. ヤコラ3つトノヨノエ ソイジャ
3人たのんだ石切は 上賃とらせて下知ばかり
らくするかいな

たまり かまん て おど 玉利の鎌手踊り

無形民俗文化財（民俗芸能）

平成元年3月31日指定

所在地：鹿児島市下福元町

保持団体：玉利鎌手踊り保存会

古くから近くの権現ヶ尾ごんげんが おに祀られた権現神社ごんげんに詣り、豊作祈願、無病息災を祈念して奉納した。鎌と棒を使った勇壮な踊りである。

終戦後の昭和22(1947)年に青年たちの手で復活され伝承されたが、その後途絶え昭和58(1983)年に34年ぶりに再復活した。

昔は、和田の伊佐智佐神社のホゼ祭りに奉納した。

踊りは、歌い手4人、踊り手は鎌3人、6尺棒3人の6人一組で、6人一組であれば何組でも踊れる。鎌と棒を打ち合う勇壮な踊りである。

唄は「おせろ（後ろ）が山で前は大川」、「清めの雨は三度ばらつく」、「山田の牛は木を引き出す」の三つである。



玉利の鎌手踊り

こ いけ し ま ま わ おど 小池島廻り踊り

無形民俗文化財（民俗芸能）

平成 17 年 3 月 31 日指定

所在地：鹿児島市桜島小池町

保持団体：小池島廻り踊り保存会

桜島では春の彼岸に岳参り、秋の彼岸に島廻りを行っていた。19代島津光久の時に始まり、豊年方祭の意味を持っていたが、そのうちに青壮年の腕力を争う競技となり、その際、舟の上での応援として踊られたと伝わっている。舟は八丁櫓で約40名を定員として、集落ごとに出して競走した。舟には着飾った女性を載せ三味線1人、太鼓1人、唄は1人、踊り子10人位で士気を高めたという。

櫓こぎの演舞では立って櫓こぎの動作をする人、座って櫓こぎの動作をする人など動作も二通りある。踊り方は反時計回りに踊る。

大正3(1914)年の噴火で桜島と大隅半島が陸続きになり、桜島を廻ることができなくなったため次第に廃れていった。

小学5・6年生にも運動会で踊るために、運動会前には教えている。

衣装や小物などの持ち物も舞台や出演する場所に応じてその時に決めている。二種類くらいありそれを組み合わせていくとおりにも使えるように考える。

おはら祭やステージでの出演などの依頼があれば出る。また、小池公民館講座でも行っている。

踊りの形態など、人数は櫓こぎは立って演技する人、座って演技する人各2名ずつの4名、応援する人2名くらい、三味線1人、太鼓1人、歌い手1人、踊り子10人くらいで現在14名が活躍している。

保存会の定例会を毎月決まった日に行っている。



小池島廻り踊り

いわ と ほう そう おど 岩戸の疱瘡踊り

無形民俗文化財（民俗芸能）

平成 17 年 3 月 31 日指定

所在地：鹿児島市花尾町

保持団体：岩戸疱瘡踊り保存会

昔、疱瘡が流行した時に人々が次々とかかり死者が出るようになったので、地域の人々が皆でいろいろ考え、疱瘡踊りをして神様に祈り願ったと伝わっている。

また、人々は集落の入口に道切りの縄を張り塩、米、胡椒をつり下げて悪霊払いもした。

その頃は男女が年配者の指導を受けながら踊っていたが、近年女性だけの踊りとなり、集落の女性が保存会員として踊っていた。しかし、数年前に一時途絶え、その後復活して踊っている。

太鼓2人1組、拍子木、唄で三味線の伴奏がつく。

踊り子全員が豆絞りの手拭を被り、赤の長襦袢を着け、お揃いの衣装を着て白足袋を履いて踊る。

大きなシベを持つ人が三人おり、大シベは長さ約86cmの三節竹（ナエ竹）で、それに約50cmの紙の御幣3垂れをつけたものを持ち、この人は黒い長着を着る。踊り子全員小さなシベを持ち「シベ踊り」をする。

この小さなシベは、一節のナエ竹約20cmのものに、2垂れの御幣をつける。

このシベを配ったり、集めたりするのは二人のひょっとこ面を被った係りの人である。

三味線に合わせる唄は、1、さまはお伊勢 2、ことしゃ 3、ごだいまつ 4、会津殿様 5、花の松島である。

踊る順序は道楽（ミチガク）、先踊り、シベ（御幣）踊り、後踊りの順で、それぞれ歌詞はちがう。

現在、三味線4名、太鼓5名、歌い手4名、踊り手25名で伝承している。



岩戸の疱瘡踊り

はな お たい こ おど 花尾の太鼓踊り

無形民俗文化財（民俗芸能）
平成 17 年 3 月 31 日指定
所在地：鹿児島市花尾町
保持団体：花尾太鼓踊り保存会

花尾神社の太鼓踊りは『平成二・三年度鹿児島県の民俗芸能－民俗芸能緊急調査報告書－』（鹿児島県教育委員会）によると、健保の頃からとなっており、元は初代鳥津忠久の母、丹後局の命日である旧暦 8 月 12 日に踊られた。現在の太鼓踊りは昭和 23(1948)年に復活されたと伝わり、また、一時期踊られず昭和 47(1972)年に再復活し、今は秋の彼岸（9 月 23 日）を大祭日として、丹後局の慰霊と病虫害や風水害の防除を祈願して踊っている。

太鼓 15 人位、鉦^{かね} 20 人位で、太鼓打ちは兜をかぶり胸に太鼓、背に矢旗を背負う。

現在、鉦 13 名、太鼓 11 名、指導員 5 名で伝承している。鉦叩きは陣笠に陣羽織で、下に黒の股引を着ける。

道楽に始まり、庭踊り（口の庭、中庭、楽、末庭の四種類の踊り）を行う。昔は踊りの先頭に紋付き袴を着た先導者が一人いた。また、三つの庭踊りには戦前まで唄が付いていて鉦

叩きが歌っていたが現在はない。楽には唄はなかった。

この踊りは「花尾楽」とも呼ばれ近隣に伝播して各地の郷土芸能に多く取り入れられている。

『三国名勝図会』に「毎年八月十二日厚地の農夫 当社の前庭に於いて金鼓を奏して舞躍を興行す 其次に婦女の舞躍あり、諸方より聚観して甚鬧なり」とあり、当時の太鼓踊りの様子がうかがえる。



花尾の太鼓踊り

おお ひら し し まい 大平の獅子舞

無形民俗文化財（民俗芸能）
平成 17 年 3 月 31 日指定
所在地：鹿児島市花尾町
保持団体：大平獅子舞踊り保存会

いつから始まったかは不明である。昔から花尾神社の大祭に奉納している。構成は獅子 1 人、捕手（捕まえる人）1 人、楽は太鼓、鉦、法螺貝が各 1 人ずつ、踊り子 15 人位、場取り 2 人、前踊りに田植え唄で踊るハンヤレ 15 人位、田植え唄では歌い手の所に櫛を立てる。

前踊りのハンヤレと後踊りの獅子舞いに分かれ、前踊りは田植え唄に合わせて刀と扇子を持った若者が入れ替わって踊り、後踊りの獅子舞いは場取りが場内整理をし、ホラ貝の音で獅子が登場する。太鼓、鉦に合わせて獅子と捕手が踊り、捕手により獅子が打ち取られる。

田植え唄は「コナエ ヒトモトナエ ヒトモトナエ ヨネハチコク（苗は小苗で 1 本苗よ 1 本苗で米が八石）」

獅子取の文句は「ヤーヤー 向こうに見えたる獅子が山 この山に 獅子がおると風説に聞いた 親の仇じゃとらえねばならぬ この獅子にとって功名手柄 山の木の葉の散るごと ちりちりぱっと うちちらす」

獅子を取った後の文句は「獅子は取ったがきびよしきびよし ここちよし これから都は思いのままじゃ やっこらさ やっこらさ」



大平の獅子舞

にし また はっ ちよう きね おど
西俣の八丁杵踊り

無形民俗文化財（民俗芸能）
平成 17 年 3 月 31 日指定
所在地：鹿児島市西俣町
保持団体：西俣八丁杵踊り保存会

かつて西俣下集落にあった諏訪神社に豊作祈願などで奉納していた。諏訪神社が明治の初め小山田の諏訪神社に合祀されてから、この踊りも廃れた。

日露戦争の戦勝祝賀を機に復活し現在まで受け継がれ踊られている。

全員が面をかぶり、右手に扇子を持ち、一人が鯛をかたどった物を、一人がヒョウタンを腰に下げ、所狭しと飛び跳ねて踊る。太鼓、三味線、歌い手、踊り子で構成されている

最初「道開き」次に「出羽」「庭踏み」と続き、唄に合わせて左に4つ、右に4つの八丁杵の動作で踊る。最初はハヤシことばに合わせてカマキリの真似で面白おかしく踊り終わる。

歌詞は①花の松島 ばらばら松よ からのい（かわいい）男の顔かくす ②これの座敷は祝な座敷 黄金花咲く金なる ③そろたそろた 踊りがそろた 稲の出穂よりまだそろた ④あがれあがれよ かさねてあがれお前さん ごちそうに とりあがる
以下略。



西俣の八丁杵踊り

にし かみ たい こ おど
西上の太鼓踊り

無形民俗文化財（民俗芸能）
平成 17 年 3 月 31 日指定
所在地：鹿児島市東俣町
保持団体：西上太鼓踊り保存会

西上の太鼓踊りは戦に出陣する時に踊られたと言われている。

昭和初期までは西上と西下が合同で、毎年五穀豊穰、病虫害防除祈願や夏の雨乞いのために一宮神社で踊っていた。鉦と太鼓の音が鳴り響くと動きの速い勇壮な踊りが繰り広げられる。

昭和 41(1966)年頃から中断していたが昭和 53(1978)年に復活した。現在は西上だけが踊っている。

踊りは「初庭」「中庭」「末庭」と大きく三つの部分からなっており、鉦7人、太鼓14人が最低必要な人数である。現在は、鉦10名、太鼓12名、その他15名で傳承している。踊りは、太鼓を先頭に鉦、太鼓と入場する。

入場→初庭→中庭→末庭の順で踊る。

鉦と太鼓が打ち鳴らされる勇壮な踊りとなる。



西上の太鼓踊り

鹿児島祇園祭（おぎおんさあ）
巡行行事

無形民俗文化財（風俗慣習）
平成 24 年 7 月 11 日指定
所在地：鹿児島市東千石町
保持団体：鹿児島おぎおんさあ振興会

鹿児島の祇園祭は『三国名勝図会』により、慶長 19(1613)年に祭り費用のために新しい土地が寄附されたことが書いてあることからこの頃に始まったとされている。

八坂神社は古くは祇園社と呼ばれており、明治時代に神社名を八坂神社と呼称するようになった。

島津氏の城下町として開けていた上町一帯には鹿児島五社である諏訪神社、八坂神社、稲荷神社、春日神社、若宮神社があり、その二番目である。鹿児島祇園祭（おぎおんさあ）の中で鹿児島市の無形民俗文化財（風俗慣習）に指定されているのは巡行行列の中の「露払い、社名旗、地方車、大鉦・祇園傘、大榎、菅のさしば・紫のさしば、御所車、弓矢、十二戴女、鉦、錦旗、御神馬、太刀、稚児花籠」である。その他祇園祭に参加している山車や神輿などは指定部分ではなく、祭りを盛り上げているのである。



鹿児島祇園祭（おぎおんさあ）巡行行列

鹿児島祇園祭の巡行行列の中でも二つの特徴的なものがあり、一つは大鉦・祇園傘の妙技である。この技は全長約 10 メートルの竹竿の先に鉦や祇園傘を付け、竹竿を片手や顎、肩などに載せ技を披露することである。もう一つは十二戴女で、以前は桜島の巫女の家柄の年配の女性が、お祓いを受けたシデの付いた榎を苧桶に入れ、さらに大きな桶に入れ頭の上に載せてお賽銭を貰って歩くと言う奉仕をしていた。

現在は、十二戴女を公募している所以若い女性がほとんどである。



さい ごう たか もり どう くつ
西郷隆盛洞窟

記念物（史跡）

昭和 49 年 3 月 15 日指定

所在地：鹿児島市城山町

所有者：鹿児島市



西郷隆盛は、明治 10 (1877) 年 9 月 19 日から同 24 日未明に至る 6 日間、この洞窟で起居した。

しかも、薩軍と政府軍との城山攻防戦という西南戦争の最終段階において、政府軍の城山包圍網の中、西郷隆盛はこの洞窟で過ごし、最後まで薩軍の指揮をとっていた場所として、重要な史跡である。

『西南記伝』によると、明治 10 年に岩崎谷に造られた洞窟は全部で 10 個あった。第 1 窟を西郷隆盛が使用し、第 5 窟が本堂会議室に使用されたとある。

しかし、西南戦争終結後、明治 40 (1907)

年に至る約 30 年間のある時期に、西郷隆盛を追慕する至情から、西郷隆盛が使用した第 1 窟を残して、他の洞窟を、廃止したものと考えられる。

そこで鹿児島市は、明治 41 (1908) 年に「南洲翁洞中記念碑」の標識を第 1 洞窟の前庭に建てて洞窟を保存することとし、現在に至っている。

なお、『鹿児島籠城記』によると、西郷隆盛の使用した第 1 洞窟の規模は、「奥行 2 間、間口 1 間位」と記されている。

現在の洞窟の規模は、奥行きが 4 m、間口が 3m、入口の高さは 2.5m である。



西郷隆盛洞窟



さい ごう たか もり しゅう えん ち
西郷隆盛終焉の地

記念物（史跡）

昭和 49 年 3 月 15 日指定

所在地：鹿児島市城山町

所有者：鹿児島市



明治 10 (1877) 年 9 月 24 日、西南戦争の最終末にあたり、西郷隆盛以下彼に従った幹部が自刃ないしは戦死したところとして伝えられ、貴重な史跡となっている。

南洲祠堂建設委員長であった山本徳次郎は、そこに建てられてあった記念碑及び敷地を公園付属地として鹿児島市に寄付した。

記念碑の碑文には、「丁丑之役交戦数か月、薩軍日州長井村の重囲を破り、連戦数回鹿児島に帰り城山に拠る。

時に 9 月 1 日、官軍従ってこれを囲む。これよりのち、激戦虚日なし。同 24 日の未明、官軍衆を悉くして迫る。

翁すでに決するところあり。諸士を卒いて城山を下る。弾丸雨下半ば途に殞る。翁ついに岩崎谷口の砲壘を擁して自刃す。年 51 歳。桐野利秋、村田新八、桂久武、池上貞固、別府景長、辺見十郎太、その他悉くこれに倣う。今この碑の立つ所、これ、その終焉の地なり。いづくんぞこの旧跡をして煙滅せしむるに忍びんや。ここにおいて、有志相謀り石碑を建てもって永く記念となす。明治 32 年 9 月、これを建てる。」とあり、西郷隆盛終焉の概要を伺い知ることができる。



西郷隆盛終焉の地

てん ぼ ざん ほう だい あと
天保山砲台跡

記念物（史跡）

昭和 49 年 3 月 15 日指定

所在地：鹿児島市天保山町

所有者：鹿児島市



天保山は、天保(1831～1845)年間に、甲突川の川底に堆積した土砂の川浚いによってできた砂揚場の別称である。

この地に砲台が設けられたのは、嘉永3(1850)年のことである。『薩藩海軍史』の川尻訓練場台場図によれば、海に突出して石塁を築いて11門の砲を配備している。『旧邦秘録』等によれば、その内訳は、攻城砲7、野砲2、臼砲2が配置されて、当時の兵員の配備は、物主島津織之介久直4番組士族で「露砲台防弾火薬庫あり」とある。

文久3(1863)年の薩英戦争においては、7月2日正午に最初にイギリス艦隊に砲撃の火ぶたを切ったのは、ここの砲台であった。

現在、松林の中に土塁状に残った部分に、円形の砲台台座の一部を残しており、当時を

しのばせている。

県立図書館蔵の安政(1855～1860)年間と推定される城下絵図には、「塩浜」の南の部分に別に「砂揚場」と記載されており、その先端部には砲台の図が描かれている。

付近一带は、幕末の薩摩藩の訓練場跡であり、天保山中学校校庭には、「島津斉彬公御陣屋跡」の碑が建てられている。



天保山砲台跡

ぎ おん の す ほう だい あと
祇園之洲砲台跡

記念物（史跡）

昭和 49 年 3 月 15 日指定

所在地：鹿児島市清水町

所有者：鹿児島市



祇園之洲は、稻荷川の河口に川浚いの土砂を集めてできた州であるが、これを台場設置場所に注目し、着手したのは当時の家老調所広郷である。

広郷の死後その意志は、海防の急務から斉彬の藩政に活かされ、台場は、嘉永6(1853)年10月に完成し、文久3(1863)年の薩英戦争の際には、7月2日午後2時過ぎ、東側から迫ってきたイギリス艦隊のアームストロング砲の側射を受け、諸台場のうち最も損害の大きかった砲台であった。

「薩藩海軍史」によると、この時祇園之洲台場には6門の砲が配備されていた。

薩英戦争時に守備にあったのは、「祇園之洲台場大砲賄」によると、台場物主島津権五郎久馨以下6番組士族70余名で、攻城砲5門、臼砲1門をもち、1門につき、十数名が配置されていたという。この戦闘で、西側の1門

を除いて全て使用不能になり、唯一の戦死者(伍長税所篤風)を出している。

現在、松方正義の筆になる「薩英戦争記念碑」が建てられている。また、当地は西南戦争の政府軍戦死者の墓地としても使用されており、記念碑が立てられている。

この地には、平成12(2000)年に県立石橋記念公園が開園されている。



旧薩摩藩砲台跡碑



祇園之洲砲台跡